段落	文	頁	行	原文	神山訳	寺沢訳
		163	26	Anmerkung 2.	註解　二.	注解二〔理性の諸関係の数による表現〕
462	1		27 28 29 30 31 32	Bekanntlich hat *Pythagoras Vernunftver-* *hältnisse* oder *Philosopheme* in *Zahlen* dar- gestellt, und in neuern Zeiten ist das Rechnen als gleich bedeutend mit dem Denken, oder wie man sich genauer ausgedrückt hat, mit dem reinen *realen* Denken ge- nommen worden.	周知のように、【ピタゴラス】は、〈【理性の関わり】〉という〈【哲学上の問題】〉を〈【数】〉で具現した。また、近代でも、計算は、思考と――それもより厳密に表現されたように、純粋で【実在的な】思考と――同じ意味に受け取られている。	周知のように、ピュタゴラスは理性の諸相関または哲学問題を数で表わしたし、また近世においてもかぞえることが思考と同じ意味をもつものと、あるいはより正確な表現の仕方では、純粋な実在的思考と同じ意味をもつものと受けとられている。
	2	164	32 1 2 3 4 5 6	-- Auch ist in pädagogischer Rücksicht die Zahl für den geeignetsten Gegenstand des innern An- schauens, und die rechnende Beschäftigung mit Verhält- nissen derselben, für die Thätigkeit des Geistes gehalten worden, worinn er seine eigensten Verhältnisse und über- haupt die Grundverhältnisse des Wesens zur Anschauung bringe.	――また、教育のことを考えても、〈数〉は、内的に直観することにとってのもっともふさわしい対象とみなされているし、〈数〉の関わりに取り組んで計算することは、精神の活動とみなされている。この活動において、精神は、みずからのもっとも独自な関わりを、そして一般に本質の〈根本的な関わり〉を直観にもたらすのだとされる。	――教育上の見地からも数が内的直観作用のもっとも適した対象であるとされ、数の相関〔比〕にかかわる計算をすることが、精神がそれによって自己のもっとも固有の諸相関や、一般に本質の根本的諸相関を直観にもたらす精神の活動だとされている。
	3		6 7 8	-- Wiefern der Zahl dieser hohe Werth beykom- men könne, geht aus ihrem Begriffe hervor, wie er sich ergeben hat.	――〈数〉というものがどの程度こうした高い価値に浴することができるかどうかは、これまでに判明したような〈数〉の概念から読み取れることである。	――どの程度まで数がこの高い価値に値しうるかは、すでに明らかになっている数の概念からわかることである。
463	1		9 10 11	Die Zahl ist die absolute Bestimmtheit der Quan- tität; ihr Element ist der gleichgültig gewordene Unter- schied.	〈数〉は、量の絶対的な規定態である。〈数〉のエレメントは、無関心になった区別である。	数は量の絶対的規定態である。数の境地は無関心的になった区別である。
	2		11 12	Sie ist also die Bestimmtheit an sich, die zu- gleich völlig nur äusserlich gesetzt ist.	したがって、〈数〉は、規定態それ自体であり、これは、同時に完全にたんに外面的にのみ設定されるのである。	したがって数は規定態そのものであり、この規定態は同時に完全に外的にのみ定立されている。
	3		12 13 14 15 16	Die Arithmetik ist daher analytische Wissenschaft, weil alle Verknüpfungen und Unterschiede, die an ihrem Gegenstande vorkommen, nicht in ihm selbst schon liegen, sondern ihm völlig äusser- lich angethan sind.	だから、算術は、分析的な学問である。なぜなら、算術の対象のもとにみられるすべての結びつきと区別は、その対象それ自身にあらかじめあるのではなく、その対象にとって完全に外面的に施されているからである。	算術はこうして分析的な学である。というのは、算術の対象のもとに現われてくるすべての結合や区別はこの対象そのもののなかにすでにあるのではなく、まったく外的にこの対象に付加されるものだからである。
	4		16 17 18 19 20	Sie hat keinen concreten Gegen- stand, welcher innere Verhältnisse an sich hätte, die zu- nächst für das Wissen verborgen, nicht in der unmittel- baren Vorstellung von ihm gegeben, sondern erst durch die Bemühung des Erkennens herauszubringen wären.	算術は、内的な関わりそれ自体を持つような具体的な対象をもたない。内的な関わりは、さしあたり知には隠されていて、対象の直接的な表象において与えられておらず、認識の骨折りによってはじめて探り出	算術は、さしあたりは知にとってかくされていて・それについての直接的表象のうちに与えられておらず・認識の努力によってはじめて取りだされるような内的諸相関自体をもっている具体的対象を、

					されるようなものであろう。	まったくもたない。
	5		21 22 23 24	Sondern seine Verhältnisse sind rein durch die Reflexion selbst in ihn hineingelegt; diese hat es daher in ihrem rechnenden Geschäfte nur mit solchen hineingelegten Bestimmungen zu thun.	むしろ、対象の関わりは、振り返りそれ自身によって純粋に対象へと挟み込まれている。だから、この振り返りは、みずからの計算する営みにおいて、そうした挟み込まれた規定だけを問題とする。	そうではなくて、算術の対象の諸相関は純粋に反省そのものによってそのなかに置き入れられたものであり、だから反省はその計算するという活動においてそのような置き入れられた諸規定だけを取り扱う。
	6		24 25 26 27 28 29	Weil in diesen Beziehungen hiemit nicht ein wahrhaftes Andersseyn enthalten ist, so hat sie es nicht mit Entgegengesetztem zu thun; sie hat überhaupt die Aufgabe des Begriffes nicht; geht nur an dem Faden ihrer eigenen Identität fort, und verhält sich in ihrer Thätigkeit rein analytisch.	そのため、このような関係に真なる〈他であること〉が含まれていないのだから、算術は、対立したものを問題としない。算術は、一般に概念の課題をもたない。算術は、ただ、みずからの独自の同一態の糸をたどることしかせず、みずからの活動において純粋に分析的に振舞うのである。	それとともにこれらの諸関係のうちには真の他在は含まれていないから、算術　は対立的なものを取り扱わない。算術は一般に概念の課題をもたず、その固有の同一性という導きの糸をたどって前進し、その活動において純粋に分析的にふるまうのである。
464	1	165	30 31 32 33 1 2 3	Um der Gleichgültigkeit des Verknüpften gegen die Verknüpfung, der die Nothwendigkeit fehlt, willen, befindet sich das Denken hier in einer Thätigkeit, die zugleich die äusserste Entäusserung seiner selbst ist, in der gewaltsamen Thätigkeit, sich in *der Gedankenlosigkeit* zu *bewegen* und das keiner Nothwendigkeit fähige zu verknüpfen.	必然態が欠けている結びつきに対して結びつけられたものが無関心であるために、思考は、この場合、同時にみずから自身をもっとも外的に売り渡すことにもなる活動をしており、すなわち、〈【思考枠組を欠いたさま】〉でみずからを動かし、なんの必然態もありえないものにみずからを結びつける暴力的な活動をしている。	必然性の欠けている結合に対する結合されたものの無関心性のゆえに、思考はここ〔算術〕では、活動とはいっても同時にもっともはなはだしい自己放棄であるような活動におちいる、すなわち、無思想性のなかで動きまわり、結合する必然性をまったくもちえないものを結合するという強制された活動におちいるのである。
	2		3 4 5	Denn der Gegenstand, die Zahl, ist nur der Gedanke und der abstracte Gedanke der Aeusserlichkeit selbst.	というのも、対象である〈数〉は、思考枠組にすぎず、しかも外面態それ自身という抽象的な思考枠組にすぎないからである。	というのは、〔算術の〕対象すなわち数は、外面性そのものの思想・しかも抽象的な思想にすぎないからである。
	3		5 6 7 8 9 10	In jedem andern concreten Gegenstande ist das Denken sich gleichfalls äusserlich, aber er ist zugleich an ihm selbst ein innerlich verknüpftes und nothwendiges; es findet also in ihm wesentliche Beziehungen; die Zahl dagegen hat das wesentlich Beziehungslose zum Princip.	ほかの具体的な対象のいずれにおいても、思考は、みずからにとって同様に外面的である。しかし、こうした対象は、同時に、みずから自身のもとで、内面的に結びついた必然的なものである。したがって、思考は、対象のうちに、本質的な関係を見いだすのである。これに対して、〈数〉は、本質的に〈関係を欠くもの〉を原理としている。	それぞれの他の具体的対象においても思考はやはり自己にとって外的ではあるが、しかし具体的対象は内的に結合されていて必然的なものをそれ自身のもとに〔顕在的に〕もっている。したがって思考はこうした対象のなかに本質的な諸関係をみいだすのだが、これに反して数は、本質的に没関係的なものを原理にしているのである。
465	1		11 12 13 14	Um dieser reinen Aeusserlichkeit und eignen Bestimmungslosigkeit willen hat das Denken an der Zahl eine unendliche bestimmbare Materie, die nicht Widerstand durch eigenthümliche Beziehungen leistet.	こうした純粋な外面態で独自に〈規定を欠いた様態〉であるために、思考は、〈数〉のもとに規定可能な無限の質料を具えている。この質料は、固有の関係によって抵抗をすることがない。	この純粋な外面性と固有の没規定性のゆえに、思考は数のもとに独自の諸関係による抵抗をうけていない無限に規定可能な質料をもっている。

	2		14 15 16 17	Sie ist zugleich die Abstraction von aller sinnlichen Mannichfaltigkeit, und hat vom Sinnlichen nichts als die abstracte Bestim- mung der Aeusserlichkeit selbst behalten.	同時に、〈数〉は、感性的なあらゆる多様態を捨象したものであり、感性的なものについては、外面態それ自身の抽象的規定以外のものを保持していない。	同時に数はあらゆる感性的多様性を捨象しており、外面性そのものという抽象的規定以外には何ものをも感性的なものから残存させていない。
	3		17 18 19 20	Durch diese Ab- straction liegt sie, so zu sagen, dem Gedanken am näch- sten; sie ist nur der reine Gedanke seiner eignen Entäusserung.	〈数〉は、こうした抽象態（捨象態）によって、いうなれば、思考枠組にもっとも近いものである。〈数〉は、《独自にみずからを売り渡す》という純粋な思考枠組にすぎない。	この捨象によって数は、いわば、思想のもっとも近くにある。数は思想の自己放棄という純粋思想にすぎない。
466	1		21 22 23 24 25 26 27	Der Geist, der sich über die sinnliche Welt erhebt, und sein Wesen erkennt, indem er ein Element für seine reine *Vorstellung*, für den *Ausdruck seines* *Wesens* sucht, kann daher darauf verfallen, ehe er das Denken selbst als diß Element faßt, und für seine Darstellung den rein geistigen Ausdruck gewinnt, die *Zahl*, diese innerliche, abstracte Aeusserlichkeit zu wählen.	感性的な世界を超えてみずからを高めみずからの本質を認識する精神は、みずからの純粋な【表象】としてのエレメントを求め、【みずからの本質の表現】としてのエレメントを求めるため、思考それ自身がこのエレメントであると把握しみずからを具現するために純粋に精神的な表現を勝ち取る以前には、〈【数】〉というこうした内面的で抽象的な外面態を選ぶことを考えつく。	精神は自分の純粋な表象のための・自分の本質を表現するための境地を求めることによって、感性的世界をこえて高まり、自分の本質を認識する。したがって、このような精神は思想そのものをこの境地として把握し、自己を叙述するために純粋に精神的な表現を獲得するまえに、数というこの内的で抽象的な外面性を〔自己の本質を表現するための境地として〕選択するという誤りにおちいりやすい。
	2		28 29 30 31	Daher sehen wir in der Geschichte der Wissenschaft, ehe das Denken den Ausdruck fand, der nur den abstracten Gedanken selbst enthält, die Zahl zum Ausdruck von Philosophemen gebraucht werden.	だから、我々が学問の歴史において見ることになるのは、抽象的な思考枠組それ自身しか含まない表現を思考が見いだす以前には〈数〉を哲学問題の表現に使った、ということである。	こうしたわけで学の歴史において、思考がただ抽象的思想そのものだけを含む表現を発見するまえに、哲学問題を表現するために数が使用されるということがおこる。
	3	166	31 32 33 1 2	Sie macht die letzte Stuffe der Unvollkommenheit dieses Ausdrucks aus, mit ihr verläßt das Denken, das schon die sinnliche Vorstel- lung für seine Darstellung verlassen hat, vollends auch selbst den reinen Gedanken der Aeusserlichkeit.	〈数〉は、こうした表現が不完全であることの究極的な段階となるものである。みずからを具現するためにすでに感性的な表象を離れた思考が、〈数〉によって、完全にまたそれ自身で、外面態がもつ純粋な思考枠組を離れることになる。	数はこの表現の不完全さの最後の段階であり、自己を表現するために感性的表象をすでに捨て去った思考は、数を捨てると[1]、外面性の純粋思想をさえもまた完全に捨ててしまうのである。
467	1		3 4 5 6 7	Indem nun das Denken seine Bestimmungen in diß Element niederlegt, so fallen sie um der betrachteten Na- tur desselben willen, darin unmittelbar in die Begrifflo- sigkeit herab; oder die Gedanken werden in ihm als dem gedankenlosen, zu Gedankenlosem.	ところで、思考がみずからの規定をこのエレメントに後生大事に引き下げると、このエレメントにはすでに考察したような自然があるために、思考の規定は、そのエレメントにおいてただちに（直接）、〈概念	さて思考はその諸規定をこの〔数という〕境地にすえることによって、数のすでにみたあの本性のゆえに、思考の諸規定はこの境地において直接に没概念性におちいる。換言すれば、思想は没思想的

[1] „mit“ を「捨てる」と訳すことはできないだろう。 „Mit diesen Worten verließ er das Zimmer“ （こう言って彼は部屋を出て行った。） Vgl. *GDJW.*（小学館）, S. 2715.

					を欠いたさま〉に落ち込む。いいかえれば、思考枠組は、思考枠組を欠いたエレメントであるそのエレメントにおいて、〈思考枠組を欠いたもの〉になる。	な境地としてのこの境地において没思想的なものになる。
	2		7 8 9 10	Die Gedanken, das Lebendigste, Beweglichste, nur im Beziehen Begriffene, werden in diesem Elemente des Aussersichseyns, zu todten, bewegungslosen Bestimmungen.	もっとも生命があり、もっとも運動があるものであり、ただ関係づけることにおいてのみ概念把握されるものである思考枠組が、〈みずからの外にあること〉というこのエレメントでは、死んで動きを欠いた規定になる。	もっとも生き生きしたもの・もっとも活動的なもの・関係づける運動のなかでだけ概念的に把握されるものである思想は、自己外存在というこの境地において、死んだ・運動の欠如した諸規定になる。
	3		10 11 12 13	Je reicher an Bestimmt- heit und Beziehung die Gedanken werden, desto verwor- rener einerseits und desto willkührlicher und sinnleerer an- dererseits wird ihre Darstellung in Zahlen.	思考枠組が規定態や関係の点で豊かになればなるほど、〈数〉のかたちでのその具現は、一面ではいっそう混乱したものとなり、他面ではいっそう恣意的でナンセンスなものとなる。	思想が規定態と関係とをより豊かにもつようになればなるほど、数による思想の表現は、一面ではますます混乱したものに、他面ではますます勝手気ままで意味の空虚なものになる。
	4		13 14 15 16 17 18	Das Eins, das Zwey, das Drey, das Vier, als Henas oder Mo- nas, Dyas, Trias, Tetraktys, liegen noch einfachen Begriffen sehr nahe; aber wenn die Zahlen zu weitem Verhältnissen des Begriffs übergehen sollen, so ist es vergeblich, sie noch dem Begriffe nahe erhalten zu wollen.	ヘナスまたはモナスすなわち〈一つ〉、デュアスすなわち〈二つ〉、トリアスすなわち〈三つ〉、テトラクチュスすなわち〈四つ〉は、まだしも、単純な概念にとても接近している。しかし、〈数〉が概念の広い関わりに移行するとされるなら、概念に近いかたちで〈数〉をさらに維持しようとするのは、むだである。	一、二、三、四とか、〔またはギリシア語で〕ヘナスまたはモナス、デュアス、トゥリアス、テトゥラクトゥスとかは、まだしも単一な概念のきわめて近くにある。しかし数が概念のより進んだ諸相関へと移行してゆくべきだとされる場合には、数をなおも概念の近くに引きとめておこうとしてみても、それはむだなことである。
468	1		19 20 21 22 23 24	Wenn aber auch nur im Eins, Zwey, Drey, Vier der Begriff festgehalten, wenn sie gedacht und bewegt werden sollen, so ist diß die härteste Bewegung des Den- kens; denn es hat, statt rein mit sich zu thun zu haben und bey sich einheimisch zu seyn, zugleich unmittelbar mit seiner Entäusserung zu kämpfen.	しかし、概念がもっぱら〈一つ〉、〈二つ〉、〈三つ〉、〈四つ〉に固定され、これらが考えられて動かされるべきだとしても、このことは、思考にとってもっとも厳しい運動である。というのも、この思考は、純粋にみずからを問題とするのでもみずからの故郷にいるのでもなく、同時に直接的に、みずからの売り渡しと戦わなければならないからである。	だが、一、二、三、四のなかだけに概念が固定されるべきだとしても、それらが思考され・動かされるべきだとすれば、これは思考にとってもっともつらい運動である。というのは思考は、純粋に自己にかかわりあい・自宅にいるようにくつろいで気らくにしている代りに、いきなり直接に自分の疎外態とたたかわなければならないからである。
	2		24 25 26	Es bewegt sich im Elemente seines Gegentheils, der Beziehungslosigkeit; sein Geschäfte ist die Arbeit der Verrüktheit.	この思考は、みずからの反対のエレメント、すなわち関係を欠いたさまのエレメントで運動する。この思考の営みは、狂いの労働である。	思考は自分とは反対のもの・すなわち没関係性という境地で運動することになり、思考の仕事は狂気の労働になる。
	3		26 27 28	Daß z. B. Eins Drey, und Drey Eins ist, zu begreifen, ist darum eine so harte Zumuthung, weil das Eins, das in der	たとえば、《〈一つ〉は〈三つ〉であり、〈三つ〉は〈一つ〉であること》を概念的に把握するのは、とても厳しいできない注	例えば、一が三であり、三が一であるということを概念的に把握せよという要求は、数において支配的である一は没関係

			29 30 31 32 33	Zahl herrschend ist, das Beziehungslose ist, das also nicht an ihm selbst die Bestimmung zeigt, wodurch es in sein Entgegengesetztes übergeht, sondern vielmehr diß ist, eine solche Beziehung schlechthin auszuschliessen und zu verweigern.	文である。なぜなら、〈数〉のなかで支配的である〈一つ〉は、〈関係を欠いたもの〉であり、それに、〈関係を欠いたもの〉は、それに〈対立したもの〉へと移行するゆえんの規定をそれ自身のもとで示すことがなく、むしろそれ以上に、そうした関係を端的に排除し拒絶することだからである。	的なものであり、したがって一がその反対のものへ移行するゆえんの規定をそれ自身のもとに〔顕在的に〕示さず、むしろ反対に、そのような〔移行するという〕関係を端的に排除し・拒むものであるのだから、きわめてひどい要求である。
469	1	167	1 2 3 4 5	Indem also der Gedanke sich von dem sinnlichen Stoffe reinigt, ist es die letzte Stuffe, daß ihm das Sinnliche, das Aeusserliche zum reinen Gedanken dieser Aeusserlichkeit, zur Zahl wird, und daß er diese zum Elemente und Materie seiner selbst nimmt.	したがって、思考枠組が感性的な素材から純化されることによって、最後の段階となるのは次のことである。すなわち、感性的なものや外面的なものが、思考枠組にとって、こうした外面態の純粋な思考枠組になり、すなわち〈数〉になることであり、思考枠組が、〈数〉をみずから自身のエレメントであり質料だと受け取ることである。	したがって思想は感性的素材から自己を純化しているのだから、思想にとって感性的なもの・外的なものがこの外面性の純粋思想・すなわち数になっているということは、また、思想が数を自分自身の境地と質料にしているということは、最後の段階である。
	2		5 6 7 8 9	Aber er hat auch noch diese abstracte Gedankenlosigkeit zu überwin- den, und seine Bestimmungen in seiner eigenen unmittelba- ren Form zu fassen, nemlich als Seyn, Werden u. s. f. als Wesen, Identität u. s. f.	しかし、思考枠組は、さらにまた、こうした抽象的な〈思考枠組を欠くさま〉を克服しなければならないし、みずからの諸規定をみずから独自の直接的な形式でとらえなければならない。すなわち、存在、〈成ること〉などとして、本質、同一態などとしてとらえなければならない。	だが思想はさらにこの抽象的無思想性をも克服し、その諸規定をその固有の直接的形態において把握しなければならない。すなわち、存在・成等々として、本質・同一性等々として把握しなければならない。
470	1		10 11 12 13 14 15	Was die Ansicht des gemeinen *Rechnens* selbst betrift, *daß es Denken sey*, weil es "eine Bestim- "mung der relativen Vielheit, oder der bestimmbaren "Wiederhohlbarkeit von Einem und Ebendemselben in ei- "nem Andern, durch die absolute Einheit des Identischen "sey," so ist insofern das Rechnen freylich Denken.	ありふれた【計算】それ自身の見方にかかわると、【《計算が思考である》とされる】。なぜなら、思考は、「〈他のもの〉のうちにおいて、同一的なものの絶対的な統一を通じて、相対的な多態の規定だとされる」からである。「いいかえれば、〈一つの同じもの〉という規定できる反復可能態の規定だとされる」[2]からである。したがって、そのかぎりでは、計算は、たしかに思考である。	かぞえるということは「相対的数多性の・換言すれば他のもののなかで同一のものをくり返すことの規定可能な可能性の・同一的なものという絶対的統一による規定」であるから、それは思考であるという、通常のかぞえること自身についての見解に関していえば、上述のことの限りではかぞえることはたしかに思考である。
	2		16 17	Aber Lesen, Schreiben u. s. f. ist eben so sehr Denken; denn auch in ihnen ist eine Bestimmung eines relativ	しかし、読んだり書いたりすることなども、同じ程度に思考である。というのも、	けれども、生きること[3]・書くこと等々もまたまさに同じように思考である、とい

[2] G. Bardili: *Grundriß der Ersten Logik*. Stuttgart 1800, S. 103.

[3] 見誤りの誤訳であろう。

			18	Vielen durch eine Identität.	読んだり書いたりすることにおいても、同一態を通じた相対的な〈多〉の規定があるからである。	うのはこれらのことのうちにもまた相対的に多くのものの同一性による規定が含まれているからである。
	3		18 19 20 21 22 23 24 25 26 27	Das Rechnen hat vor an- dern Functionen des Denkens oder Bewußtseyns, wie sich ergeben hat, einerseits das Abstracte seiner Materie oder Elementes voraus; aber auf der andern Seite steht es ihnen durch das Begrifflose des Eins nach, das zwar ein rein mit sich identisches und im Andern, nemlich im Vielen sich wiederhohlendes ist, aber darin sich wesent- lich als beziehungslos halten, und seinem Andern selbst äusserlich bleiben, somit die wahrhafte, nemlich die be- greifende Einheit des Denkens in ihm abwesend seyn soll.	すでに判明したように、計算は、一面で、思考なり意識なりのほかの機能よりも、それらの質料なりエレメントなりの抽象的なものを多く持っている。しかし、他面で、計算は、〈一つ〉という〈概念を欠いたもの〉によって、他の機能よりも劣っている。〈一つ〉は、たしかに、純粋にみずからと同一的なもので、〈他のもの〉において、すなわち〈多〉において反復するものである。しかし、〈一つ〉は、〈多〉において、本質的に〈関係を欠いたもの〉として保たれているはずだし、またその〈他のもの〉それ自身にとって外面的なままであるはずであって、このことによって、思考の真なる統一、すなわち思考の概念把握する統一が〈多〉において不在となるはずである。	かぞえるということは、すでに明らかにしたように、一面ではその質料または境地が抽象的なものであるという点で、思考または意識の他の諸機能よりもすぐれている。だが他面では、一が没概念的なものであることによって、他の諸機能よりもおとっている。一は、たしかに純粋に自己と同一的なものであり、他者すなわち多くのものにおいて自己をくり返すものであるが、しかしこの点で本質的に自己を没関係的なものとして保っており、それの他者そのものにとって外的でありつづけ、そのゆえに思考の真の統一・すなわち概念的に把握する統一は一のうちには存しないはずのものである。
471	1		28 29 30 31	Was es mit dem Gebrauche der Zahl und des Rechnens auf sich hat, insofern er eine pädagogische Hauptgrundlage ausmachen soll, geht aus dem Bisheri- gen von selbst hervor.	〈数〉と計算を使用することの意義は、その使用が教育的な〈基礎の核心〉をなすとされるかぎり、これまで述べてきたことからおのずから読み取れる。	数と計算との応用が教育上の主要な基礎をなすとされている限りで、この利用に関していえば、それは今までに述べたことからおのずから明らかになる。
	2	167	31 32 33 1 2	Die Zahl ist ein unsinnlicher Ge- genstand, und die Beschäftigung mit ihr und ihren Ver- bindungen, ein unsinnliches Geschäfte; der Geist wird somit dadurch zur Reflexion in sich und einer innerlichen abstracten Arbeit angehalten.	〈数〉は、非感性的な対象であり、〈数〉に取り組み、〈数〉の結合に取り組むことは、非感性的な営みである。それゆえ、こうした営みにより、精神は、みずから自身に〈折れ返り〉、内面的で抽象的な労働をするよう促されることになる。	数は非感性的対象であり、数とその結合とにたずさわることも非感性的ないとなみである。精神はこのことによって自己の内への反省へと・内面的抽象的な仕事へと近づけられる。
	3		2 3 4 5 6 7 8	Auf der andern Seite aber, indem der Zahl der äusserliche, gedankenlose Un- terschied zu Grunde liegt, so wird jenes Geschäfte zu- gleich ein gedankenloses, mechanisches Geschäft, und die Kraftanstrengung besteht vornemlich darin, die Lebendig- keit des Geistes zu tödten, den Begriff zu unterdrücken, Begriffloses festzuhalten, und begrifflos es zu verbinden.	しかし、他面で、外面的で〈思考枠組を欠く〉区別が〈数〉の基礎となっているので、そうした営みは、同時に、〈思考枠組を欠いた〉機械的な営みになる。そして、とりわけ、その〈極度の酷使〉は、精神の生命態を殺し、概念を抑圧し、〈概念を欠いたもの〉を念頭に置き、〈概念を欠いたかたちで〉これを結合する。	だが他面では外的な没思想的な区別が数の根底に存しているので、かのいとなみは同時に没思想的な機械的ないとなみとなり、努力は主として、精神の生き生きとした状態を殺し・概念を抑圧し・没概念的なものに固執し・これを没概念的に結合することにむけられる。
	4		9 10	Weil das Rechnen ein so sehr äusserliches, somit mecha- nisches Geschäft ist, so haben sich bekanntlich *Maschi-*	計算は、このようにとても外面的な営みで、それゆえ機械的な営みだから、周知の	計算はきわめて外的な・したがって機械的ないとなみであるから、算術的演算を

			11 12	*nen* verfertigen lassen, welche die arithmetischen Opera- tionen aufs vollkommenste vollführen.	ように、算術の演算をもっとも完璧に完遂する【機械】が製造されたのである。	もづとも完全におこなう機械が周知のように製作されている。
	5		12 13 14 15 16 17	Wenn man über die Natur des Rechnens nur diesen Umstand allein känn- te, so läge darin die Entscheidung, was es damit für ei- ne Bewandniß hat, wenn dem Geiste das Rechnen zum Hauptgeschäft gemacht, und er auf die Folter, sich zur Maschine zu vervollkommnen, gelegt wird.	計算の自然についてただこうした附帯状況だけでも知りえたならば、決定的なものは、精神にとって計算がその〈営みの核心〉だとし精神を完璧に機械にになりきる拷問にかけるなにか〈特別な事情〉にでもあるのだろうけれど。	計算の本性についてこの事情だけでも知るならば、計算を精神の主要ないとなみとし、自己を完成して機械にするというたえがたい苦痛が精神に負わされるならば、どんな事態が生じるかすでにきまったも同然であろう。

平成 27 年度跡見学園女子大学特別研究助成費による成果の一部（Ver.1, 2018/8/13. Copyright© KAMIYAMA, Nobuhiro）